

弥生時代と古墳時代の軍事組織と社会

藤原 哲

博士（文学）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

日本歴史研究専攻

平成28（2016）年度

博士論文要約

氏名 藤原 哲

論文題目 弥生時代と古墳時代の軍事組織と社会

本論文は、弥生時代と古墳時代の武装集団や軍事組織について考古学的な実証研究を行い、戦争の開始や国家の成立といった歴史的な課題と意義について考えることを目的とした。

論文の構成は、第1章から第4章は弥生時代を、第5章から第11章は古墳時代を対象とする。各時代共に、まず戦闘形態を復元して、それぞれの武装集団や軍事組織像を復元・推論するという共通の手順で議論を進めた。そして第12章では、時代ごとの武装集団や軍事組織の実態を対比することで、弥生時代から古墳時代への転換やその画期を理論的に論証した。

弥生時代の具体的な戦闘形態について

日本列島において、対人殺傷道具である武器や集落の周りを大溝や堀（環濠）で囲む環濠集落が出現するのは弥生時代である。このこともあって、弥生時代は戦いが始まる時代であり、一般的には環濠集落を巡る集団戦という戦闘像がイメージされてきた。

しかし日本列島で最初に環濠が現れる北部九州には、住居跡を伴わない環濠がこれまでも多数報告されていることから、従来の、居住域を巡る集団戦闘というイメージに疑問を持つに至った。そこでこのようなイメージが正しいのかどうかを検証するために、第1章で殺傷人骨を、第2章で環濠集落をとりあげて検討した。

北部九州で多く見つかっている殺傷人骨を分析したところ、弥生時代前期～中期には背後から人を殺傷する例が多いことがわかった。また、環濠集落の変遷や分布から、防御以外にもさまざまな機能を認めることができた。環濠の防御的な機能を全て否定するものではないが、住居跡のない環濠（居住域ではない環濠）が多数存在しており、むしろ環濠の機能は、居住域の防御よりも貯蔵穴の防御や区画、象徴的な要素が強いことを指摘した。

この結果、弥生早～中期の戦闘像は居住域をもつ環濠集落を巡る集団戦ではなく、“奇襲・襲撃・裏切り”といった数人単位の戦術や儀礼的なものが中心であった可能性が高いと考えるに至った。

弥生時代の具体的な武装集団や軍事組織像について

第3章と第4章では、集落における武器の出土状況や生産状況、墓域における副葬状況を分析し、武器の社会的な価値背景の視点から弥生時代の軍事組織像を考察した。

検討の結果、北部九州を除く地域では集落域から武器が出土する例が多いため、威信財とし

ての武器の社会的ステータスも全般的に低いことがわかった。これらの分析をふまえ、北部九州では弥生時代中期初頭以降、武器を威信財とする特別な階層が成立していたが、それ以外の地域では、集落内の一般成員が威信財とまではいえない武器で武装化するような状況（武装した農耕集団）を想定した。

しかし弥生時代後期末になると、北部九州以外の、利根川以西における日本列島各地でも金属製武器が普及し、武器を副葬する首長墓も出現するようになる。このことから、威信財としての金属製武器を独占した首長階層や戦士的な階層が弥生時代後期の終末まで（北部九州地域においては弥生時代中期まで）には成立しており、そこに軍事的な組織が成立する萌芽を認めることができると考えた。

古墳時代の具体的な戦闘形態について

第5章では、『日本書紀』の記述から古墳時代の戦闘像を分析した。検討の方法は『日本書紀』に記載のある武器・戦闘記述について、考古資料から批判的に分析を行い、具体的な古墳時代の戦闘像を復元するものである。

その結果、3世紀～6世紀の東アジア世界の戦闘では、城郭を巡る攻防戦や、重装騎兵の存在が特徴的であることがわかった。その反面、日本列島の戦闘は徒歩による弓矢戦闘が主流であり、朝鮮半島を含む東アジアの戦闘とは異なる戦闘文化や戦闘様式が存在していたことを指摘した。

古墳時代の具体的な武装集団や軍事組織像について

古墳時代の軍事組織に関しては、“常備軍”を巡る論争の研究史が存在している。考古学の資料の大部分が古墳からの出土遺物（副葬された儀礼的道具）であることから、その争点の一つとして、副葬資料の取り扱いに関する課題が指摘されている。

第6章と第7章においては、古墳出土の武器は葬送儀礼の痕跡であるという前提を明確にした上で、副葬資料を多角的に分析した。具体的には、甲冑を副葬した状況の型式分類や、墳墓における副葬品配列の分類、武器を副葬した被葬者の性別の検討などを行った。こういった分析を通じて、古墳時代における武器の社会的な価値体系を明らかにした。

その結果、古墳時代前期の大型前方後円墳祭祀における武器副葬や、古墳時代中期の武器の大量埋納などについては、副葬行為における儀礼的な様相が強く、直接的に副葬武器から軍事組織を復元することが困難であることがわかった。

他方、特に古墳時代中期における中小首長層の武器副葬に関しては、埋納に際して実際の武器組成を意識した副葬行為が行われていることが明らかとなった。このことから、古墳時代中期の副葬資料からは、実際の軍事組織像を描ける可能性が導かれた。

この成果を受け、第8章と第9章では古墳時代中期に的を絞り、より詳細な軍事組織像の復元を試みた。そして古墳時代中期では、近畿地方中枢部に存在した政権（ヤマト政権）において、大量の武器の生産や配布などを管理した政治機構が形成されていたことを再確認した。更

に、中期のヤマト政権が、地方の専門的な武装集団を点的に組み込むことによって、全国的な軍事組織を構築していた状況を具体的に示した。

第10章においては、古墳に設置された埴輪のうち、武人を象った武人埴輪を分析した。分析の方法は、古墳に並べられた埴輪祭祀の検討や、武人埴輪の組合せをモデル化することである。このことによって、古墳時代中期に成立した全国規模の軍事組織が、古墳時代後期には整備充実している状況を論じた。

第11章では、第5章から第10章まで多方面から検討した古墳時代における軍事組織像をとりまとめた。そして古墳時代の軍事組織が、相対的に未発達な古墳時代前期の段階から、古墳時代中期に広域な軍事組織が日本列島において初めて形成され、後期に至ると様々な武装集団の階層（職掌）化が進行していく様相を具体的に指摘した。

軍事組織の変遷を通じてみた戦争の開始や国家の成立について

第1章から第11章までの研究成果を受け、第12章においては弥生時代から古墳時代における軍事組織の変遷に関する理論的な考察や歴史的な位置づけを行った。

アンジェイエフスキーの社会学的な研究を基礎とし、軍事参与率・服従度・凝縮性といった観点から考察を行い、弥生時代前期～中期社会の軍事組織の様相はタレンシ型（Msc）、弥生時代後期（中期の北部九州地域含む）～古墳時代前期における軍事組織は騎士型（msc）、古墳時代中期～後期の軍事組織は職業戦士型（mSC）の軍事組織であると規定した。

そして鉄製武器が普及する弥生時代後期や、軍事組織が整備化されていく古墳時代中期を変化の画期として重視し、特に古墳時代中期（5世紀）においては、軍事参与率・服従度・凝縮性が共に変化する最大の画期を認め、この段階こそ、国家規模の軍事組織が本格的に指向され始めた段階、“戦争”の名に値する武力闘争が開始された時期であると評価した。

本論文の研究は、従来、あまり検討されることのなかった弥生時代や古墳時代の具体的な戦闘像を明らかにしたところに独自性がある。また、副葬資料を多角的に論じることで、社会的な存在としての軍事組織の検討が可能であることを示した。更に、理論的な考察を行い、武装集団や軍事組織を歴史的な事象として位置づけたが、戦争という行為と国家という存在が極めて密接な関係にあり、日本列島における戦争や国家の開始が古墳時代中期であると導いたことが、本研究の重要な研究成果である。